
特別講演**ウイルス感染と細菌感染**
—— 感染症・アレルギー・自己免疫の間 —— (抄録)

横 田 俊 平

横浜市立大学医学部 小児科

感染因子を原因とする疾患は「感染症」と呼ばれるが、その病態は複雑である。それは感染因子と生体反応との拮抗・均衡関係がその後の病態を決定するからである。古典的感染症はウイルスによる細胞破壊、細菌毒素による組織破壊が病態の中心になる。他方、結核の空洞形成は結核菌成分に対する遅延型過敏反応が形成する病態である。副鼻腔炎兪がインフルエンザ菌、肺炎球菌などの持続感染を基礎として気道慢性炎症に拘わり、小児喘息の慢性化に拘わっている可能性がある。またウイルス感染を契機とする過剰な免疫応答が高サイトカイン血症を招き、臓器・組織障害からDIC、多臓器不全に至る致死的病態が「高サイトカイン血症症候群」である。敗血症ショックもTNF α の過剰産生による病態である。感染症、アレルギー自己免疫現象は各々独立した疾患ではなく、感染因子と免疫応答の均衡の相違による表現型の違いと捉えられる。